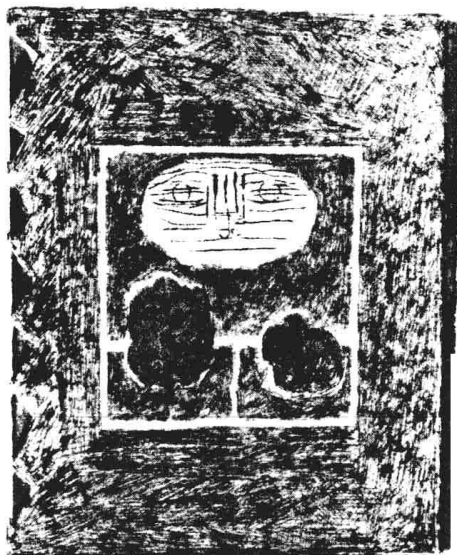


死の扉の前

芹沢光治良



新潮社版

し とびら まえ
死の扉の前で



昭和53年11月25日 発行

昭和54年1月20日 2刷

定価 1200 円

著 者 せりざわ こうじ ろう
芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式
会社 新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

振替東京4-808

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本株式会社
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kojiro Serizawa 1978 Printed in Japan

死の扉の前で

第一章

——吉川さんでしたね……主人は出掛けなければならぬですよ。何かお急ぎのご用ですか。

——ええ、是非お会いしたいのです。お出掛けならば、門前に待たしていただいて、途中までお伴させてもらいます。

——でも、出掛ける前に、原稿を書き上げなければならぬと言っていましたから、すぐ出掛けられますかしらね。

——いいです。僕は幾時までも待ちます。

玄関の三和土^{たたき}で、そんな風に家内が応対している声が、二階の六畳の書齋に筒抜けに聞えた。待つという客を通せる便利な部屋もない小さな借家で、居留守もつかえなくて、正直者の家内が当惑している様子が、私にも判った。家内はまた、玄関での問答が私の耳にはいったものときめて、呑氣^{のんき}に二階へ呼びかけた。

「ね、どうします。上ってお待ちしてもらいますか」

「支度してすぐ出掛ける……吉川君、表の野っ原で待っていてくれんか——」

私は原稿を途中で止めて、急ぎ背広に着換えることにしたが、二日前に訪ねて来たばかりの彼

が、どんな急用があるのか、不審でならなかった。特に、このW大学生はふだん遠慮がちで、こちらが忙しいと知れば、引き留めても、また来ますと、急いで引揚げたのだから……二日前には、故郷の高校生の従弟を伴って来たが、用件はなさそうで、最近読んだ演劇書の話などをしてから、来年卒業しても大学院に席をおいて、大学の演劇部で芝居を実地に勉強するのだと、長閑に話していた……

戦前にはよく大学生が書齋に現れて、人生論や芸術論をしたものだった。書齋も広く人手も多くて、家中で大学生を歓迎したが、私も闘病中で齷齪仕事もなかったから、喜んで学生の相手になり、時々家を開放して集ってもらったりした。戦争末期には食糧不足で、学生をもてなすことも困難になったが、若い人々は精神の糧を求めるように書齋に集り、学徒出陣の日まで、そんな状態がつづいた。出陣した学徒は、きびしい訓練や不自由な事情を克服して、前線から私を励ます言葉を書き送って来たものだ……その後、戦に破れて生還した学徒の幾人かは、再び学業につくために焼野に化した東京に戻って、私を探して不便なこの世田谷の三宿の寓居を訪れてくれた。私も戦災にあつて家を焼かれ、全財産を失い、五人の家族を餓死させないために、ただ終日原稿用紙に向つて懸命に苦闘していたが、その無惨な生き様が、戦場から戻った若者達に、どう感じられたか、みな戦場での苦労など語らずに、学業に励んで、日本の復興に参加するのだというように、社会へ出て行つた。この人々が出陣するとき私に残し、また前線から熱情をこめて書いて来た言葉——先生、文化の灯を消さないで下さいという切ない言葉を、私はよく現在でも思い出して、若者達を裏切らなかつたか、激しく省みるのだが……そうだ、敗戦から十年たった現在、私の書齋を叩く大学生はあまりない。たまに縁故のある大学生が珍しく訪ねてくれても、それは就職試験前に、受験する官庁や会社の重要人物に紹介を頼む用件で、人生や社会について問ひかける者は殆どない。吉川君は例外で、二年近く、さしたる用事もなさそうなのに、月に一、

二回訪ねて来ては、雑談するだけで満足そうに帰って行った。満足そうにと思ったのは、私が忙しすぎて、彼の胸のなかを覗かなかったからで、彼は戦前の学生とちがった人生や社会について、問いかけていたのを、私は迂闊に気付かなかったのではなからうか……

そんな風に考えながら、私はあたふた用意して家を出た。門前の幅三米もない狭い道路の反対側に、高さ十五、六米もある二本の樺が梢をひろげているが、吉川君は夏服の上衣を腕にして、その幹によりかかっていた。九月七日というのに、晴れて真夏の陽が照っていた。

銀座の山一証券ホールで開かれるペンクラブの緊急相談会に出るのだが、先ず陽の照りつける路を、三宿神社前をぬけて、多聞寺橋をわたり、玉電の三宿停留所まで、二十分以上歩かなければならない。この暑さで、喘息持ちの私は外出に気が重かった。タクシーは勿論、自動車も少ない頃のこととて、停留所まではいやでも歩かなければならないが、いつも人通りがないので、ゆっくり歩けばよかった。しかし、吉川君は私と並んで歩き出すと、急ぎ込むように話すのだ――

「先生、一昨日つれて来た従弟は、真柱さんに似ていませんかでしたか」

「真柱さんて、天理教の中山正善さんですか」

「そうです。従弟は真柱さんの子ですが、似ていませんでしたか」

「吉川君、君の従弟はたしか、木下正夫君とか言ったね……注意して見なかったせいか、特に似ているとも思わなかったけれどね……」

「実は真柱さんの落胤で、幼い時から叔母夫婦が実子として大切に育てたから、木下姓を名のって、僕も従弟だと思っていました。叔母夫婦にはちっとも似ていませんし、確かに真柱さんの子供です……」

「君のご両親は天理教の大教会長だと、いつか話していたが、木下君のご両親も信者ですか」

「ええ、叔母夫婦は台湾から引揚げた小さな事情教会（復興を図っている教会）の会長です――」

「そうだったね、思いだしたよ。君の家は有名な教会だったね。たしかお父さんは天理教本部の本部員か準本部員をしているのだったね。君の名の善二の善は、お父さんが生き神と仰いでいる真柱さんの正善から、無断で、善をいただいたと、いつか君は話していたね」

「先生、父の信仰や教会など、近頃僕は軽蔑すると言っているのか、無視しているのです。先生は、父や叔父達の信仰上、従弟が真柱さんの落胤だなんて言うべきでないと、お考えですか」

「別に考えはしないよ……ただ真柱は、天理教では神の代理者として、信仰の中心であるし、実際、絶対の権力者だろう？ それに、君の従弟の父が誰かと明瞭に判断するのは、生みの親以外なかなか難しいことだろうな。君の両親や叔父さん夫婦はそのことを知ってるの——」

「勿論承知でしょうが、僕や従弟には知らせません……恐らく口を裂かれても言わんでしょね。でも、僕は今度従弟を東京に呼んで、生母に会わせようとして、従弟が真柱さんの子だと、はっきり知りましたよ」

「なんだ、一昨日来た時には、来年受験するW大学の下検分をさせるために上京させたなんて……君は話していたじゃないの——」

吉川君が余り肩を厳いらせて話すので、私はそう笑って、彼の気分を和らげようとした。

「そう言わなければ、彼を東京へ連れ出せなかったからです。でも、W大学の下検分もさせたから、先生に嘘を言ったものではありません。ゆうべ生母に会わせる努力をして夜行で帰郷させました。なにしろ、二学期がとくに始まっていますから……でも可哀相な従弟です」

そう吉川君は大きく吐息して、一気に話すのだった。

「敗戦後従弟が叔母夫婦と台湾を引揚げたのは、小学校の二年生の二学期の終り頃でしたが、引揚船には、日本人がこぼれ落ちそうにたくさん乗っていたそうです。そのなかに、台湾の各地にちらばっていた天理教の布教師や信徒が多く乗りあわせていて、あの時の坊ちゃんがこんなに大

きくなられましたかとか、まあよく成人なすったとか、叔母夫婦にさまざまな言葉をかけて、なつかしそうに従弟の顔を見たり、さすがに素姓は争えませんねなどと、ひそひそ私語する者もあって、苦しい輸送船のなかで、いつの間にか叔母夫婦と従弟を中心にごたごた集ってお手振などをしたそうです。尤も、少年だった従弟について、信徒達が無神経に発した言葉や私語が、深い意味をもって彼の胸に疼きはじめたのは、中学生になってからのようで……中学生になって休暇毎に、僕の両親が彼をうちの教会に招いて僕といっしょに楽しく暮させたが……中学三年生の夏休みの或る日、海水浴の帰りに、彼はむりやり僕を教会の裏山に誘って、海を眺めながら——兄ちゃん、秘密にする約束をしてよ、と念を押してから、輸送船の上で聞いた言葉を真剣な表情で打明けて、自分は現在の父母の子ではなくて、実の両親は他にあるのではないか悩んでいると、無器用に話したのです……

「その証拠に、いくら自分の顔や容姿を鏡に映して見ても、父や母にもらったと思える点がどこにもないばかりか、父母は引揚げ当時の物の不自由な頃から、彼を飢えさせたら誰かにすまないというような態度で、食糧を必死に探しまわったことを話すのです。その上、もとの熱心な信徒で引揚げから他県に落着いた石山さんという小母さんが、ようやく汽車の切符が買えるようになったからと言って、リュックサックに、食糧やいろんな物をつめて背負って来て、神前に供えて下さいとか、会長さんに喜んでもらいたかったとか、言うべきなのに、坊ちゃんに不自由させてはすまないと思って——と、挨拶したが、よく考えると不可解な挨拶だろうと、言うのです。僕の父が休暇のたびに彼を教会に招いて、大切に僕といっしょに過させてくれるのも、おかしいというのです。父の部下教会がたくさんあって、どこにも中学生があるのに、僕の父が誰も大切に招いたりしないって……いや、お前が甥だからだよと、注意すると、彼のように姪や甥がほかにもいるのに、彼一人を僕の父が特別扱いしていると、反駁するのです。それから、僕の教会の

月次祭には、毎月前日から学校を休んで両親といっしょに僕の教会にお詣りする習わしであったが、前年の秋の大祭には、本部から真柱さんのお入り込み（お出掛け）があるからお手伝いだと言つて、両親は二日も前から僕の教会へ行くというのに、彼には留守番をするように命じたそうです。大祭が日曜日にあたるので、土曜日の夕に独りで行くからと簡単に言つたところ、喜ぶはずの両親が、慌てたような様子で、駄目だと頑固にゆるさなかった。両親が彼の希望をそんな剣幕で拒否して叱つたのは、初めてのことでびっくりしたが、その夜、両親が心配そうに話しあっているのを偶然耳にして、立ち竦んでしまったと言うのです。あの子がああ言うのだから、やはり大祭にお詣りさせたらと、母親が言うのに、父親は、真柱さんがお入り込みなので、こころない者があの子を見て、うっかりどんなことを口にするか知れない、そしたら真柱さんに申し訳ないばかりか、あの子だって大きくなつたから、どんな風に気をまわすか知れないからって反対したそうです。その瞬間、彼は台湾から輸送船に乗りあわせた見ず知らずの、引揚げの信徒達がみな口にした言葉が、一度に思い出されて、両親の言葉に結びついて、何か自分の出生の秘密が真柱さんに関係ありそうに、本能的に感じられたと言うのです……

「それから一年近く、その秘密に苦しみながら、天理教の出版物から、真柱さんの写真を切り抜いて、鏡に映る自分の顔と幾度も見較べて、似ているところが多いので……自分は真柱さんの子ではないかと、気がついたが、真柱さんは生き神様だから、そんなことを思つてはいけなさと我慢したもの、疑問は離れないし、でも、誰にも話せないことだから、毎夜独り神殿に額ずいて、自分の父は真柱さんではないか教えて下さいと、一心に神様にお願ひしたが……神様はいつも黙つていて、ついに教えてくれないと言つて、涙をこぼすのです。そして——兄ちゃん、自分は何年かかってこの秘密を解いて、真実を知る努力をするから、自分を助けてくれ、これは兄ちゃんと二人だけの秘密で、他の人には頼めないからって、言うのです……僕は彼の話に、眼下に眺

めていた海に突然津波がおきて、小山といっしょに波に呑み込まれそうに驚いて、うん、分った、協力する、約束するよと、言いながら、従弟を引きたてて、山を降りました。それは僕がW大に入学した年の夏のことですが、あの頃、僕は信仰について秘かに疑問を持っていたので、中学生の従弟から、考えるテーマを突きつけられた気もしたのです——」

私も照りつける陽に頭を殴られるようにして黙って吉川君の話を聞きながら、埃ほこりっぽい路を歩いたが、そのとき三宿の停留場の前に出ていた。運よく上り電車が着いていた。彼を促して飛びのるようにして乗った。電車は混んでいたが、一台やりすごすと、当時の玉電は、次の電車がなかなか来ないからだった。その混み合った電車で、吉川君は待ち切れないように話し出した。

「僕はそれから上京する度に、丹波市たんぱいち（天理市）へ寄って、数日詰所つめしよで厄介になつて、天理教の信仰と教団について調べたのです。僕がお地場（本部）に寄ることで、両親や教会関係者は喜んだが、僕は信仰という仮面をつけた謀反人むはんにんだったわけです。その仮面と父親の教団の地位のおかげで、さまざまな人に会って話がきけたし、調べることもできたし、真柱さんが台湾に巡教した歳月もわかつて、従弟の父が真柱さんであっても、不思議はないことが、すぐ分りましたが……それ以上のことは全く困難で、台湾から戦後引揚げた教会長や信徒を探して、一人一人ていねいに叔父夫婦と従弟について質問したが、誰も口を噤つぐんで最初は要領を得なくて絶望しました……お地場で知ったんですが、真柱さんは戦前の日本の天皇以上の権力者ですね。天理教団というか天理王国の独裁者で、しかも神の代表者として生きた神のように扱われているから、真柱さんを批判するようなことになりそうな事柄には、一切耳をかさないのです。だから、従弟の疑問、想像が真実だと、ますます思われて、生母を探しあててより他に方法がないと考え、僕は苦労しました——」

「君、混雑な電車だから、そうした話は、落着いたとき、聞かしてくれんか」

たまりかねて、そう吉川君にそつと注意した。

玉電の終点から、国鉄の渋谷駅へ歩いて出て、国電で有楽町まで行くのだが、玉電の終点からの路も、渋谷駅の内外も、驚くばかりの人であつた。雑多な人混みは、無人に等しいとても考えるのか、吉川君は私の横にくつつくように並んで、早速話し始めた。

「先生、生母に会うのに二年もかかりました。東京の赤坂にいました。会ってから、従弟の生母だと、認めさせるまでが、一苦勞でしたが、三回目に出て話していると、さすが母親ですね。涙をこぼして、一目会いたいと言うので、しめたと思って、父親は誰ですかと問いかけると、牡蠣かきのように黙りこくつてしまつて……どんなに頼んでも、涙を拭うばかりで口をわりません。最後に、いつあの子に会えるかと言うので、段取りをして昨日会わせる約束をしたところ、母と子との対面では困る、台北であの子の産れる時に世話した産婆だということにしてくれ、さもなければ会わないと、また難題を持ち出して……これで自分は背信者になるからとますます悲しむので、父親はやはり真柱さんだなど、僕は確信をもちましたが――」

予期に反して吉川君は渋谷でも別れないで、私について国電に乗りこんだが、今度は話しかけなかったから助かった。しかし有楽町駅から銀座の山一証券ホールの方へ歩き出すと、吉川君はまた早速話し出した。

「先生は真柱さんに親しいそうですね」

「いや、親しくはないよ」

「天理教の機関紙に『教祖様』を連載しているではありませんか」

「そのことは真柱と関係ないことだよ」

「そうですか。でも、僕は本部員さん方から聞いたけれど、先生は真柱さんに親しいから、『教祖様』を書いているという専らもっぱらの噂ですよ。真柱さんは信頼する友達だから、先生に史料を提供

しているという噂もききましたよ」

「それは全く根も葉もない誤解だよ。そんな噂を信じることをみると、君はあれを読んでいないんだな」

「いいえ、読んでいます」

「読んでいるって……書き出した二十四年の頃からか」

「いいえ、先生のお宅に伺う少し前からですから、二年半ぐらいですが、先生の『教祖様』で、僕は初めてほんとうの教祖を知りました」

「すると、三年半か四年間分ぐらいの連載を読んでいないのだね……最初の半年ばかり、史料不足でいろいろな人を訪ねて頼んだが協力を得られない苦心を書きつづけたんだよ……最近でも時折、文章の最後に『史料のある方は協力して下さい』と、書き加えてあるだろう」

「真柱さんから史料は頂けなかったのですか——」

「著書はもらったよ。道友社で発売しているもので……特別に史料といえるものではないが——」

「直接に真柱さんに頼まなかったのですか」

「頼んだよ」

「すると、先生は真柱さんに親しくないのですか。真柱さんのお友達ではないのですか」

山一証券の銀座支店の会議室前に着いたので、吉川君と別れたが、会議室にはもう川端会長や事務局長の松岡女史などが集っていた。

その年（昭和三十年）六月十四日に、ウィーンで開催中の第二十七回国際ペンクラブ大会が、二年後の一九五七年の第二十九回国際ペンクラブ大会を東京で開催することに決定したという国際通信電報が、日本の新聞社にはいって、大騒ぎになった。敗戦後、日本には国際会議がどんな分

野でも開かれたことがなかったので、このニュースは各社とも明るく取りあげて十五日の朝刊に大きく報道された。ただ日本ペンクラブは寝耳に水で当惑した。ウィーン大会には代表として芳賀檀、北村喜八の二君が出席しているが、なんの連絡もなかった。二代表が大会に出発する前にも、東京で大会を開くなどということは、ペンクラブの内部で話題にもならなかったし、まして東京で大会を開くというような提案を、日本代表がするはずがないからだった。

しかし、十五日の朝外務省の文化部から日本ペンクラブに連絡があつて、十四日にオーストリア駐在公使から公電がはいり、それによれば、イタリアが候補地としてヴェニスを挙げている他には、大部分の代表が東京案を支持しているから、日本側が正式に承諾すれば、実現するだろうし、十七日までに諾否の返事をしらせて欲しい、ということであつた。ペンクラブはあわてて翌十六日の夕、緊急幹事会を開いて、政府とも協議して至急態度をきめることにした。

幹事会といっても、その頃ペンクラブは社団法人でもなく、ペン憲章のもとに平和と言論の自由とをまもり、国際文化交流を願う同志的なペンマンの集りで、組織の都合で、会長、副会長、幹事長、事務局長、各一人と数人の幹事を選んであるが、経済的な基礎があるのでもなく、国際大会に出席する代表も、みな自費であつた。事務所さえ、或る善意の事業家の三原橋に近い事務所の一隅に、エッセイストクラブの事務所と同居しているような状態だった。緊急幹事会を夕方開いたのも、その時刻には、エッセイストクラブの事務所に入がなくて、何とか十二、三人分ぐらいの席がつくれるからで、番茶でみな満足した。その夕は、外務省の担当の若い事務官が出席して、情報文化局の意向を伝えて——各国と文化交流をはかる上で、これほど有意義な催しはめつたにないのだから、政府でもペンクラブに協力して是非実現したいと考えているが、まだ期間もあることだし、今から準備すれば、十分間にあうから……という話であつたが、川端会長の意見は、国際大会に出席している代表からなんの連絡もないことだし、必要な場合には電報でこ

ちらと連絡して、東京開催を受けることもできるわけだが……ただ問題は経費で、その点、慎重に考えなければ……ということだった。その経費も、旅費は参加者が自弁するとしても、滞在費は主催国が負担しなければならず、大体外国の参加者を百五十名ぐらいとして、三千万円程度と予想された。敗戦後十年たったばかりの昭和三十年には、三千万円というのは気の遠くなるような金額に考えられた。

その後六月下旬から七月にかけて、何度も幹事会を開いたが、代表が帰国しないで、詳細の事情が不明のまま、決定できなかったが、その九月七日には、代表の一人、北村君が帰国したので、幹事だけではなく評議員にも集ってもらうことになり、三原橋の事務所から遠くない山一証券の銀座支店長の厚意で、二、三十人集れるホールを借りて、緊急評議員会が開かれたのだった。

そして、私も出席したのだが、途中吉川君の話したことが、精神に絡みついて落着かないで困った。

北村代表の帰国報告は、それまで長い手紙で何度も知らせて来たから、特に目新しい興味はなく、ほんやり聞いていたが、東京招致の問題は、芳賀代表が北村君にも相談せずに、独断で大会の議案にかけたために、北村君は周章狼狽して、会議後ホテルに帰ってから、激怒して芳賀君と大論争になり、その問題を日本ペンクラブへ打電報告できなかったことを詫びたが、その話のなかで、突然私ははっとして、息を呑んだ――

「現在の日本ペンクラブの経済事情で、何千万円の経費をどうして作れるかって、詰問したところ、芳賀君は、日本ペンが経費をつくれなくて、東京で開催できなかったら、自分が天理教の真柱に頼むからいい。真柱は第二十九回国際ペン大会を立派に奈良か天理で開いてくれるからね。くよくよし給うな、安心しろと、ぬけぬけ言うのですからね」と、真柱が持ち出されたからだ。

「真柱って、何のことだい」と、質問した者があった。

「天理教の中山正善という管長のことだよ。大阪高校時代にたしか、武田麟太郎の同級生だったはずだよ」と、誰かが説明した。

「その真柱って、そんなに資産があるのか」

「芳賀君の話では、そのくらいの金額は真柱のポケットマネーから出せると言っていました。それに、東大の宗教学科や宗教学会等にも、資金援助をしている文化人で、戦争末期から食糧難の頃には、東京の文学者など盛んに真柱詣まきよどをして、酒や食糧の恩恵にも浴したから、この際ペンクラブの会員になってもらえばいいと、芳賀君は力説していたが――」

そう北村氏が説明していた時、左横にかけていた伊藤整君がそつと私に問いかけた。

「君は天理教の機関紙に教祖伝を書いているそうですが、真柱を知っている？」

「会ったことがある程度には知っている」

「そんなに経済力がある人ですか」

「よくは知らないが、芳賀君の話は誇張ではありませんか。尤も天理図書館に古書を集めるのに、金に糸目をつけないという噂で、古書蒐集家しゅうしゅうかとしてヨーロッパでも有名なようだから、経済力はあるうが、それとて皆、貧しい信者の汗と涙の結晶でしょうからね……」

「すると、ペンクラブのことなど、頼めないですね」

「ペンクラブが、どんな宗教であれ、宗教団体の力で大会を開いたら不名誉ですね」

私は伊藤君と話しながら、半年ばかり前に、文芸批評家の亀井勝一郎君が、文芸家協会の理事会の帰りに、天理教の教祖伝を書くよりも、真柱を小説の主人公にした方が、面白いし、有意義ではないかと言ったことを、ふと思ひ出していた。亀井君はしばしば真柱に会うらしく、天理教本部で、地方の信徒達が彼の姿を遠く見るだけで、生き神を仰ぐように至福に目を輝かしているし、彼の言葉を直接に聞いて、生れかわるような喜びに震えているし、見るから感動する光景だ